

➕「遠見視力」を重視した視力検査でよいのか

遠くを認識する視力を遠見視力、近くを認識する視力を近見視力と呼びます。5メートル離れたランドルト氏環を見て切れ目の空いた方向を答える通常の視力検査では、遠見視力を調べているのです。この検査の結果がよかったからといって、近くのものまではっきり見えるとはかぎりません。どちらの視力が重要なのかは、その人の生活スタイルによって変わります。

しかし近年は、近見視力の重要性が高まってきました。学校での健康診断で近見視力検査を導入する動きも見られます。近見視力は30センチ離れたランドルト氏環で検査します。

具体的に「30センチの距離のものを見る」といっても、どんなものを見るときなのか想像できないかもしれません。その代表としては、携帯電話が挙げられるでしょう。画面と眼の距離は約30センチです。ほかにはリングの皮を剥くときや、本、新聞を読むとき、子どもであれば学校で教科書を読むときなど、近距離を見る機会は想像以上に多いのです。

また、ほとんどの学校では遠見視力しか測定しないので、子どもの近見視力の不良は気づかれにくいものです。しかし、近くのものがよく見えないことで、授業についていけなかったり、スポーツなどで本来の能力を発揮できなかったりというケースもあります。最近では近見視力の重要性があらためて見直され、近見視力検査の導入をはかる小学校も増えているようです。

近見視力に問題があれば、眼に余計な負担をかけ、眼精疲労を引き起こします。運転手を職業としての方であれば遠見視力のほうが重要ですが、そのほかにも動体視力（動的に変化する状況を、速く正確に見分けて判断する能力）や深視力（広い空間の中で対象の位置関係を認識する能力）も必要となります。

最近では、近見視力と遠見視力に加えて、70センチから1メートル先のものを見るための「中間視力」という概念が現れました。パソコン画面など、近見能力よりも遠いものを見る機会が増えてきたからです。